

日本のタンゴに携わる方達は、アルゼンチンの人から、どうしてそんなに日本人はタンゴが好きなのだろう？」とよく聞かれるそうですが、確かに日本人にとって、タンゴは外国の音楽で、しかも地理的に一番遠い国のものなのに不思議だと思います。

でもタンゴは、基本的に日本人の感性にとてもしっくりくるような気がします。ですから、日本の曲をタンゴにアレンジしたのも数多くありますが全く違和感がなく、むしろ、より味わい深くなっている様に感じます。

只、ピアソラは、今迄の音楽、クラシックやジャズを徹底的に学んだ上で、タンゴを今までの音楽的規制から解き放ち、又別の複雑さを加味することにより、全く新しい感覚の音楽を生み出しましたので、その面白さ、味わい深さは格別だと思います。ということで、両者共、夫々、独特の魅力があると思います。

タンゴは、アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスで1870年～1880年頃に生まれましたが、元々アルゼンチンは移民の国で、イタリア系、スペイン系が大多数を占めますが、そのころ移民たちが急増し、ヨーロッパのワルツ、アフリカのカンドンペ(アフリカの宗教音楽から派生した太鼓と歌の音楽)、キューバのハバネラ(アフリカ音楽の影響を受けてできた)等をミックスしてできたのがタンゴだとされています。

初期のころは場末の安酒場の音楽で、主にダンスの伴奏として演奏され、使われる楽器もシンプルなものでしたが19世紀末頃になると一般にも知られ始め、その不思議な魅力に心を奪われる人が増えていきました。

1910年頃からは、バンドネオン2、ヴァイオリン2、ピアノ、ベースの6重奏がタンゴサウンドの基本になり、歌入り芝居に挿入されて多くのタンゴが役者を兼ねた歌手によって歌われて、今日も有名なタンゴ曲のほとんどが1920年代に歌としてヒットしたもということもあり、多くのタンゴ歌手が誕生し、又同時に楽団の演奏技術が向上して、その演奏スタイルも、一つは流麗さとリズム部分の交代や、強弱の表情付けで一定の軽快なリズムを刻む「エル・オンセ」型と、もう一つは、柔軟なリズムの粘り、ソロ重視で、激しい感情移入の「オ・デ・カロ」型の2つが定着して、このころがアルゼンチンタンゴの黄金時代でした。戦争を経て少し下火になったころ 戦後間もなく、アストル・ピアソラが、タンゴに革命をもたらし、タンゴ熱は復興し芸術家も取り上げるようになって現在に至っています。

日本でコンチネンタルタンゴといわれているタンゴは、1910-20年代にフランスのパリを中心にヨーロッパへ紹介されたアルゼンチンタンゴに、同地の音楽家たちがそのリズムと形式をまねて作り出したタンゴで、リズム自体には気迫や微妙な味わいが欠けるものの、甘美で感傷的な旋律の親しみやすさにより、ダンス音楽、サロン音楽として世界各地に流行しました。

日本へのタンゴの流入はコンチネンタルタンゴが先で、1920年代の末ころから欧米の演奏家のレコードによりもたらされ、ダンスホールを中心に社交ダンスとして流行し、40年までには **桜井潔**とその楽団を筆頭にレコードや、ダンスホールに出演していた多くのタンゴバンドや、**淡谷のり子**等タンゴを得意とする歌手達を通じて親しまれていましたが、いよいよこれから花開くという時に戦争に突入し、タンゴの発展も一時中断されました。

しかし、戦後、民間放送による日本のタンゴ楽団の活躍の場は拡大し、上野の「金馬車」から始まり、銀座 渋谷 新宿に相次いでタンゴ生演奏を聴かせる喫茶店が開店し **早川真平**と**オルケスタ・ティピカ東京**、**坂本政一**と**オルケスタティピカ・ポルテニア**、続いて**西塔辰之助**と**オルケスタ・ティピカ・パンパ**等を中心として、他54の楽団が活躍する、いわゆる**カフェ・コンサート全盛時代**となりました。

1966年頃になると演奏者が次々とアルゼンチン、南米各地スペイン北米へと演奏旅行に出かけ、その旅の終了と共に日本のタンゴブームは下火になり、多くの楽団も解散に追い込まれました。が、その残留メンバーと共に坂本政一ポルテニアは復活し、そのメンバーの中に、今日本のバンドネオン奏者のトップランナーである小松亮太の両親も所属していました。

以下日本のタンゴ・ブームの立役者達

☆桜井潔 (1911－1961) 静岡県旧家に生まれ東洋音楽学校に学び 1932 年(バイオリンを手にクラシック界に入り、新交響楽団のコンサートマスターを経て、1935 年サクライ・イ・スオルケスタを組織。東大出身で逢坂商船社員としてアルゼンチンから帰国したばかりのバンドネオン奏者、杉井幸一に支えられ、海外からのタンゴやポピュラー音楽を日本人向けに見事にアレンジし、東京溜池のフロリダンスホールに出演、その名はダンスファンを中心に知れ渡り、1951 年民間放送ラジオ東京発即当時から 30 年続いた「歌のない歌謡曲」の基礎を築きました。

☆早川 真平(1914 - 1984)大阪に生まれ、25歳の時渡辺はま子の伴奏楽団を編成 1947 年に、タンゴ楽団『オルケスタ・ティピカ東京』を結成。1950 年に藤沢嵐子がこの楽団に加わりやがて結婚、1958 年には、歌手の菅原洋一が、この楽団での歌でデビューを果たしました。

☆坂本 政一 (1909—1995) 大阪うまれで大阪音楽大学卒業。桜井潔楽団のコンサートマスター、バンドネオン奏者を務め 1951 年、『坂本政一楽団』を設立。翌年「坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニア」と改称。

☆藤沢 嵐子 1925— 2013) 東京生まれ 1944年に東京音楽学校を中退して一家で満州に渡り、父の勤める工場の女工に歌を教え、大連への移転後や帰国後は家計を支える為にダンスホールで歌っていました。そんな時中原幸太郎に出会い、彼の東京六重奏楽団で歌い始めましたが、NHK ラジオ『バンド・タイム』で彼女の声を聴いた早川真平がその歌声に惚れ込み「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」の専属歌手として引き抜かれ 1951 年にビクターからレコードデビューして以来 1960 年代まで、「タンゴの女王」と呼ばれ、精力的にコンサートを行い、しばしばアルゼンチンや中南米諸国を公演旅行で回っていました。1971 年に「早川真平とオルケスタ・ティピカ東京」が解散した後は、引退して家庭に入りましたが 1980 年に復帰し、久々にアルゼンチンでコンサートやレコーディングを行うなど、本格的に活動を再開するも、やがて引退し 2013 年新潟県長岡市の病院で老衰のため死去

☆西塔辰之助とオルケスタ・ティピカ・パンパ：日本のダリエソンといわれ、日本で最も人気の高いアルゼンチンのタンゴ楽団「ファン・ダリエソン」のナンバーを得意とする当時新進のオルケスタで、若いタンゴファンを着実に掴み、人気はうなぎ昇り。西塔辰之助亡き後、弟の西塔祐三に引き継がれて楽団は現在も存続しています。

☆小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス ピアニストの小沢泰がリーダー。華麗なスタイルで現在に至るまで地道に活動を続けている楽団の一つ

☆岡本バンドネオントリオ ティピカ・コリエンテス。ティピカ東京などで活躍したバンドネオン奏者。小編成のバンドに早くから取り組む。

バンドネオンは別名「悪魔が発明した楽器」ともいわれていますが何故でしょう？普通の楽器では音階は順番に並んでいることがあたりまえですが、バンドネオンは、右に 38 個、左に 33 個あるボタンが音階通りではなくバラバラに配列されているのです。又、同じボタンでも蛇腹を押すときと引くときで出る音が違うのです。なんて難しい楽器なのでしょう！
でも、タンゴの物悲しいメロディーにマッチして、音色を聴くだけで血が騒ぎ、不思議なエネルギーと喜びがわき、時には人を魅惑の虜にするという意味では、やはり作り主が悪魔だからでしょうか？